

日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL.03-3503-2722 <http://www.jnpc.or.jp/>



中国発株安ショック

上海市場の暴落を受け、各国市場で一斉に下落した株価を示す証券会社のボード

=東京・八重洲で8月25日午前9時15分

撮影：小川 昌宏(毎日新聞写真映像報道センター)

ゲストの本音を引き出す質問 質疑応答が会見の核心

「きょうの会見はうまくいった」。主催者として安堵するのは、ゲストのことばが新鮮で、それまで知らなかった事実や、意外な分析、考え方に接した時だ。そんな発言を引き出した質問に「うまい」と拍手したくなる時もある。あるいは「もう少し突っ込んで聞けばいいのに」と注文をつけたくなる時もある。質疑応答こそ記者会見の核心だ。

日本パラリンピック委員会会長の鳥原光憲さんの会見でこんな問答があった(8月5日)。

「2012年のロンドンで五輪が終わった途端『サンキュー・フォー・ウオーミングアップ』(前座をありがとう)という看板が街中に出た。こういうパラリンピックの自信を東京は持っているのか」「五輪が終わってからは観客が集まらないという人もいたが、パラリンピックだって満員にできる。五輪は準備をしてくれるんだからこの順番がいいんだ、といいたい」。意表を突く問いかけに意気を感じさせる答えが返ってきた(「会見詳録」あり)。

ひたすらパソコンをたたいて記録作りに懸命の若手記者も見かける。ゲストの表情を観察し、二の矢、三の矢の質問を期待したい。(中井良則)

今月のことば

「(東芝不適切会計問題について)やっちゃいけないことをやった。これに反省」
宮内義彦・日本取締役協会会長(8・18) 4ページ

「TPPも安保法制も思考停止して米国に追随しているように見える」
鈴木宣弘・東大大学院教授(8・19) 5ページ

照明を受け幾何学模様が浮かび上がる新天井



10階ホールに初めて入ったクラブゲストが息をのみ、会場を見回しながらステージに上がる姿を何回も間近で見た。高さが3階分もある丸天井はドーム型の吹き抜けで、日本記者クラブの名物だ。ホールは夏の1カ月間、工事で使えなかったが、より美しくなって再開した。日本プレスセンター（白石興二郎社長）が鉄

10階ホール新装工事 天井新しく

骨アーチ構造の天井の耐震工事を7月27日から8月25日まで行った。設計・日建設計、施工・清水建設。

新しい天井を見上げてほしい。ダイヤモンドのような面が重なり、照明の色合いや見る角度によって微妙に変化する。幾何学的な美しさを感じる方もいるだろう。日本プレスセンターによると、ポリ塩化ビニール樹脂でコーティングしたガラス繊維布で作られ、面積230平方メートル、重さ457キロ。

天井工事だけでなく、壁紙を張り替え、音響効果も改善した。照明の色も切り替えられる。クラブ主催の記者会見のメイン会場として、また会員が貸し切り利用する施設として新装ホールの可能性が広がりそうだ。

クラブゲスト	
宝田明・俳優／坂本慎一・PHP研究所 主事／福永文夫・獨協大教授	3
堀川恵子・ジャーナリスト／鳥原光憲・ 日本パラリンピック委員会会長／宮内 義彦・日本取締役協会会長	4
鈴木宣弘・東大大学院教授／海老原嗣生・ 雇用ジャーナリスト／ラマポーザ・南ア 副大統領	5
北岡伸一・国際大学学長	6
「料理ボランティアの会」会見・福島 スイーツ・アフタヌーンティー	6
試写会 天皇と軍隊	7
憲法1条と9条の関係が見える 金子秀敏	

ウェブサイト「会見詳録」一覧 (2015年1～8月)	7
ワーキングプレス	8・10
首相官邸クラブ 歴史見つめ直した暑い夏 「70年談話」取材に奔走 時事通信社 松本賢志	
2016年参院選合区 「地方vs憲法」でいいのか 高知新聞社 池一宏 広がる選挙区 取材態勢どうする 徳島新聞社 武田浩文	
リオ五輪まで1年 準備の遅れ、環境問題…課題山積 だが「遺産」に期待も NHK 原口秀一郎	

被災地通信	11
被災路線にBRT導入 “鉄道問題” 前進するか 三陸新報社 小野寺英彦	

書いた話書かなかった話	12・13
経済記者の醍醐味 「論理的な事件」の数々を取材して 村田泰夫	

リレーエッセー	14
「あっちで覚えた」 死刑から再審無罪の免田栄さん 熊本日日新聞社 高峰 武	

マイBOOKマイPR	15
会員掲示板	16
新しいOB会員／情報発信	
事務局から	17
写真回廊	18

日本プレスセンターと日本記者クラブは二人三脚で歩んできた。1969年に発足したクラブはホテルの間借りが続いていた。自前の会場場や施設を備えるため日本新聞協会加盟各社が中心となり、日本プレスセンターを設立、1976年、地上11階建てのビルが完成した。クラブは9階全体と10階ホールを借り、いつでも会見を開ける態勢を整えている。

法人賛助会員63社に 東京ビッグサイト、サカタインクス 入会

東京ビッグサイトとサカタインクスの2社が9月1日、法人賛助会員として新たに入会した。法人賛助会員は63社となった。

東京ビッグサイトは東京都江東区にある日本最大のコンベンション施設を管理、運営する。東京オリンピ

ック・パラリンピックでは国際放送センターとメインプレスセンターが開設される。
サカタインクスは1896年、大阪で新聞インキの製造販売を始めた老舗。世界各国で事業を展開し、新聞との関係は深い。
東日本放送（仙台市）が9月1日付で法人会員を退会した。法人会員は135社。（専務理事 中井良則）

彼ならどうしただろうかと マンデラ氏とラマポーザ南ア副大 統領

南アフリカのマンデラ大統領がクラブで会見したのは1995年7月5日だった。マンデラ氏の下で反アパルトヘイト闘争を闘ったラマポーザ副大統領が8月25日会見した。20年前のマンデラ氏の写真とサインを見て、ラマポーザ氏は語った。

「ネルソン・マンデラは国民の父であり、世界のアイコンです。日々触発され、志を継げるよう模索しています。困難な状況に置かれたとき、彼ならどうしただろうかと自分たちにいつも問いかけます。この場にいたら、皆さんの質問にどう答えたいでしょうか。おそらく私よりは、よほど気の利いた受け答えをしたことでしょう」

※5ページに関連記事

戦後70年

宝田 明 俳優

「戦争は憎悪しか生まない」

8・6(木)シリーズ企画「戦後70年 語る・問う」◎/司会・川村晃司委員/出席・59人/動画



81歳にもかかわらず、相変わらずのダンディー。壇上の宝田明氏は往年の二枚目俳優のオーラを放っている。「ゴジラ」の主役をはじめとする銀幕のスタ

ー、そして華やかなミュージカルの舞台でライトを浴びて歌い踊るエンターテイナーのイメージは健在だ。その宝田氏の「憎悪」という感情に翻弄された自らの戦争体験の話は衝撃的だった。

満州鉄道の技師だった父と共に旧満州のハルビンに移り住んだ宝田氏が、小学5年生で迎えた終戦。そして、日ソ中立条約を一方的に破って満州に侵攻したソ連軍によって生活を一変させられた。ソ連兵の略奪、凌辱、惨殺を目の当たりにし、自身も腹部に銃撃された経験は、今でもロシアという国に対する憎悪の元になっていると語る。「戦争とはそういうもの。憎悪しか生まない」

また、兄が戦争によって人生を狂わされたことも、宝田氏の安保法制をめぐる今の政治状況に対する強い姿勢に通ずる。「憲法9条は死守しなければならぬ。戦争は絶対してはならない」と強調する宝田氏に、「歴史を語り継ぐ」姿勢が感じられた。

日本BS放送報道局プロデューサー 三舟 小文

坂本 慎一 PHP研究所主事

玉音放送の「謎」を解く

8・6(木)同シリーズ企画◎「思想史から見た玉音放送」/司会・竹田忠委員/出席・52人/動画

戦後70年を機に、宮内庁が玉音放送の録音原盤と音声を初公開した。本土決戦を覚悟していた国民はラジオで初めて天皇の声を聞くことで、厳しい敗戦を受け入れ、その後の占領にも従うことになった。

この日本史上、最も衝撃的な放送は、いかにして生まれたのか? NHKドラマ「玉音放送を作った男たち」の原作者・坂本氏は、時の情報局総裁で、日本放送協会の会長も歴任した下村宏こそが発案者で仕掛け人であり、ラジオというメディアの力を熟知していた彼が、いかに周到な準備を重ねたかを発掘資料などを駆使して説明した。



しかし、今ではこのことはほとんど知られていない。それは下村自身が、その功績を消し去ったためだという。それはなぜか? 戦後の食糧危機や天皇の

戦争責任論などが台頭する中で、全てはご聖断のおかげとすることで、天皇制を守り抜こうとしたためではないかと推論した。

最近、若い研究者の間から、日本は敗戦をきちんと総括できていない、敗戦に至る経緯や事実を見ないようになっているという指摘が出ているが、まず、戦後の出発点から説明することが必要ではないか。

企画委員 NHK解説委員 竹田 忠

福永 文夫 獨協大学教授

「憲法と安保」のせめぎ合いとは

8・7(金)著者と語る「日本占領史1945-1952 東京・ワシントン・沖縄」/司会・星浩委員/出席・51人/動画

終戦から70年の夏。戦後日本の原点を考えるには格好の書である。著者の福永文夫・獨協大教授に「書ききれなかったこと」などを聞いた。

「マッカーサーが上司の言うことを聞かずに独断で占領政策を進めたことは、米国の大きな誤算だった」そうだ。戦後改革はGHQ(連合国軍総司令部)が押しつけたと言われるが、現実には「GHQも自分たちが作って制定された憲法に拘束された。民法改正などはGHQの意思に反して憲法」の精神にのっとって進められた」と言う。



戦後日本の政治が「憲法と安保」という2つが引き寄せ合っているという見解も興味深い。開いたという見解も興味深い。まさに国会で審議されている集

団的自衛権の行使を容認するための安全保障関連法案をめぐって、憲法と安保という2つのせめぎ合いが問われている。日本政治の本質を探るために指標になった。ワシントン、東京に加えて沖縄からの視点を加えていることも、普天間問題のルーツを考える上で参考になる。

7年前の『大平正芳』に続く好著。われわれ政治家記者もどうかかしている、福永氏のような実証派の学者に領分を侵されてしまふ。

企画委員 朝日新聞特別編集委員 星 浩

堀川 恵子 ジャーナリスト

「命が軽く扱われている」怒り原点到

8・4(火)著者と語る「原爆供養塔 忘れられた遺骨の70年」
/ 司会：倉重篤郎委員 / 出席：41人 / 動画



司法制度をめぐる一連のノンフィクション作品で堀川さんには以前から注目していた。今回も秀作。話も上手であることがわかり大収穫だった。堀川さんによると、広島原爆による死者数が発表者や発表年によって大きなブレがあることが気になっていた。あの地獄の業火で焼き殺された人々の命がそんなにいいかげんに軽く扱われているのか。そんな怒りが原点にあった。

例えば、広島平和記念公園の中に原爆供養塔がある。この塔の中に7万人の遺骨が納められており、その一部は名前、住所、発見場所のメモもあるのに向に遺族に届けられる気配がない。

供養塔の守り手とも言われた佐伯敏子さんがそのことに気づき、手弁当で遺族を調べ遺骨を返す活動を始めた。堀川さんはその佐伯さんを引き継ぎ、取材のノウハウを使って、残る無縁仏の身元を追いかけた。ところが意外に作業は進まない。なぜか。実は、被爆者の身元調査に当たったのは10代の少年兵からなる特攻部隊であり、メモそのものが正確でなかったという事情が判明した。どうしても一線を取材がしたくて広島テレビをデスクで退職して10年。次作が待ち遠しい。

企画委員 毎日新聞論説室専門編集委員

倉重 篤郎

鳥原 光憲 日本パラリンピック委員会会長

パラリンピックのレガシーとは

8・5(水)記者会見/司会：別府育郎委員 / 出席：48人 / 動画 / 会見詳録



2012年のロンドン大会に強烈な記憶がある。オリンピックが閉会を告げるころ、テレビや街中の看板にパラリンピックのCMがあふれ出した。「前座をありがとう」。五輪を前座扱いする不遜なまでの自信のままに、大会は大成功を収めた。

20年東京大会に同様の自信を持ち得るか。

「自信があるとは言えない」と答えたのは誠実さゆえだろう。それでも、8万人の大観客席を連日満員にしたロンドン大会を「ベンチマーク(指標)」とし、「観戦を通じて障害に対する認識も変わってほしい。障害を1つの個性として生かす。そうした意識の変革がレガシー(遺産)となる」の言葉には、大いなる自負を感じた。

実直な語りを横で聞きながら、昨年、当クラブで会見した東京五輪招致の指南役、マーティン・ニューマン氏の話を思い出していた。「ロンドンがパラリンピックを成功させたのではなく、パラリンピックがロンドンを変えたのです」。東京もそうであれば、どれだけすてきか。

それにしても、総じて五輪関係者より、パラリンピック関係者の体温を熱く感じるの、なぜなのだろう。

企画委員 産経新聞論説委員室論説副委員長

別府 育郎

宮内 義彦 日本取締役協会会長

東芝「不適切会計」はトップの資質問題

8・18(火)昼食会・研究会「東芝不適切会計問題と企業統治」
/ 司会：安井孝之委員 / 出席：89人 / 動画



社長経験者3氏が辞任した東芝の不適切会計問題について、宮内氏は「トップが意図して隠そうとしたり間違ったことをした場合、社外取締役が活動していても見つけることは不可能だ。米国でもエンロンなどの事件はあった。上が間違ったことをすればこうなるというだけの話ではないか」と語り、トップの資質の問題とした。

だが140年の歴史を持つ企業で不祥事がなぜ見過ごされたのか。宮内氏は不正発覚には

「内部告発と監査法人の発見の2つしかない」としつつ、日本企業の経営構造が同質的・保守的であることを指摘した。「日本では業績不振の経営者が次の経営者を選ぶ。欧米の場合、社外取締役が次のトップを選ぶ。日本では革新的な経営者は出にくい」ROE(株主資本利益率)で見れば日本企業の経営力は欧米企業の半分だ」

会見の締めくくりはバブル崩壊後、同氏がずっと主張してきた「日本型経営」の改革。「日本の経営者は魂がありすぎる。従業員や取引先、地域、株主など多くを担ぎ過ぎていて身動きが取れない。一方、米国は株主を徹底的に大事にする。どちらも極端で、私は(中間地点である)ハワイが天国だと言っている」と語り、会場を沸かせた。

中日新聞・東京新聞出身 大澤 賢



鈴木 宣弘 のふひろ
東京大学大学院教授

「日本は少し頭を冷やしたらどうか」

8・19(水)研究会「TPP」①／司会：村田泰夫前企画委員／出席：86人／動画



近著『食の戦争』(文春新書)ではTPP(環太平洋経済連携協定)の本質をデータや裏話を紹介しながら暴いた。自国の利益追求に「自由化」の大義名分

を利用する米国の国家戦略である、と。会見でも、豊富なデータと多角的な視点で、7月末の閣僚会合決裂を分析した。

ニュージージーランドの「心変わり」が元凶といわれる中、日本が最大の利益を得るはずの「自動車の原産地規則」も合意できず、医薬品特許の保護期間でも対立が解けなかったという。

ニュージージーランドの主張も「乳製品は最大の輸出品目で、譲らないのは理にかなっている」と述べた。むしろ、それで「戦犯」扱いされるようでは「TPP自体が筋の悪い、無理な協定なのだ」とも。さらに専門の農業分野に話が及ぶと、一段と舌鋒鋭く、声のトーンも上がった。

もちろんTPPがあるがなかるうが、日本の農業は疲弊している。政治が思考停止の対米従属をやめ、長期の広い視野に立った政策を練るよう提言しつつ、「最後は国民の選択だ」と語った。その意味で、国民が農業を支えることを選んだスイスの事例紹介が非常に興味深かった。

毎日新聞論説委員 中村 秀明

海老原 嗣生 つぐお
雇用ジャーナリスト

就活の後ろ倒しは「愚策」とバツサリ

8・24(月)研究会「新就活ルール」／司会：水野裕司委員／出席：29人

長引く学生たちの就職活動を是正しようと、経団連が説明会や面接のスケジュールを前年より大きく後ろ倒しした今年の就職戦線。この変更を、就活事情を長年ウオッチしてきた経験から「天下の愚策」とバツサリ斬って捨てた。



就活のスタートとなるインターネット経由で企業へのアプローチが可能な近年の就活では、一握りの難関大学生だけではなく「普通の学生」たちも最初は超人気企業に挑む。大手が全滅すれば準大手へ。その後ようやく未知の中堅中小企業へと目を向け始めるそうだ。

この方向転換に例年、数カ月かかるといふ。大手の内定出しが8月までずれこんだ分、気持ちの切り替えが遅れ、卒業前に就職先が決まらない学生が昨年より増えるのではないかと危惧する。

スケジュールがどうであれ、大手企業はトップ人材を確保できる。有名大学の学生も相応のところに落ち着く。「就活をめぐる議論は、ポリユームゾーンの学生と中小企業とをどう結び付けるかに軸足を移すべき」との持論には説得力がある。

日本経済新聞編集委員兼論説委員 石鍋 仁美

シリル・ラマポーザ 南アフリカ副大統領

マンデラ氏の遺志を継ぐリーダー

8・25(火)記者会見／司会：土生修一事務局長／通訳：宇尾真理子／出席：70人／動画



2013年12月に逝ったネルソン・マンデラ氏の腹心として知られる大物の初来日だった。

90年代前半の民主化に向けた体制移行期、現在の与党「アフリカ民族会議」(ANC)の交渉団を率い、アパルトヘイト(人種隔離)政策を主導した白人政権・国民党などの難交渉をまとめた。

12月12日のANC党大会で副総裁に選出されて政界に復帰。第2期ズマ政権(14年5月発足)で副大統領に指名された。法律、経済に明るく、人種・部族を超えて慕われる。次期大統領への可能性を問われると「指導者たる者は自ら手を挙げるのではなく請われてなるもの。請われたら『NO』と言うことはできないと思う」と控えめに答えた。

最も穏やかな表情をみせたのは95年7月5日、同じ場所に座ったマンデラ氏の写真を見つめた時だった。「困難な状況に置かれた時、『マンデラ氏ならどうしただろうか』と自らに問い続けている」。北東部リンポポ州にルーツを持つ少数民族ヴェンダの出身。融和や多様性を重んじる南アフリカにふさわしい実力者が動き出した感がある。

毎日新聞前ヨハネスブルク支局 高尾 具成

北岡 伸一

「21世紀構想懇談会」座長代理
国際大学学長

8・31(月)記者会見/司会:小栗泉委員/出席:98人
/動画/会見詳録

戦後70年を迎えた今年は、首相の談話とも絡み、歴史はとりわけホットイシューとなった。「21世紀構想懇談会」の座長代理を務めた北岡氏は、あえて火中の栗を拾った。



「何が悪かったかを含め、その時代の歴史に関するコンセンサス(国民的合意)を作るワンステップにしたいと考えた」。この日の会見で北岡氏は、懇談会の報告書に込めた思いを、率直に吐露した。「基礎になるのはまず認識」として、満州事変(1931年)以降については「明らかに侵略である」と断じた。

反省と謝罪についても、その認識に立つて所見を示した。反省について、安倍首相が用いた「リペンタンス」という言葉が重い。オペラ「ドン・ジョヴァンニ」に出てくる、「悔い改めよ。さもなければ地獄に……」の悔恨こそがリペンタンスである、という。謝罪に関しては「責任は究極的に個人が負うべきもの」であり、国民全体が背負うべきものでないと強調する。戦後ドイツのワイツゼッカー大統領の演説を引きながら語るのだが、その源流にあるドイツの哲学者のカール・

はじめをつけ責任を果たす心構え

ヤスパースや社会学者のマックス・ウェーバーらの所見にも触れるのを忘れない。ならば新しい世代が負うべき責任はといえば、「記憶し、過ちを繰り返さない責任」だと言う。前者の責任と後者の責任は峻別すべきだと指摘する。過去に学び未来に生かそうとする語りは、情理を兼ね備えている。それが国際社会の心に届くと信じている。

何よりも興味深いのは、戦後70年談話が侵略、植民地支配、反省、謝罪に言及したことが示すように、首相の発言が懇談会の議論を織り込む中身になったことだ。「首相は懇談会の議論をよく読んで、アイデアに生かされたのだろう」。首相自身がうわづった語り口でなく、自分の言葉で語りかけたようにみえたのは、その成果ともいえる。

この夏復刊された、当時の指導者の回想録『最後の御前会議 戦後欧米見聞録―近衛文磨日記集成(中公文庫)』などをひもといてみても、日本の現代史は繰り返してならない蹉跎に満ちている。

大きな失敗のせいだろう。戦後の日本は平和を志向するようになったが、国際社会で起きている不条理には目をふさいでいる。ドイツ語でいえば、「オーネ・ミッシェ(僕だけにご免)」であり、それではいけない。

失敗から学び、はじめをつけたいうえで、日本はもつと国際社会に貢献すべき。これが北岡氏の結論である。賛否はあるだろうが、これこそが正面から論ずべきテーマのはずだ。

日本経済新聞編集委員 滝田 洋一

「料理ボランティアの会」会見と 福島スイーツアフタヌーンティー

8・29(土)司会:杉尾秀哉委員/出席:50人/動画

一流のシェフやパティシエなどでつくる「料理ボランティアの会」が、活動開始から10年を記念して記者会見を開いた。協賛する「ふくしまスイーツコンテスト」でグランプリに輝いた桃のスイーツ(写真)が出席者に振る舞われ、さわやかな香りが会場を包んだ。

活動のきっかけは2004年の新潟県中越地震。会の提唱者で北海道・洞爺湖サミットの総料理長を務めた中村勝宏シェフは「おいしい料理で心身ともに元気になってほしかった」と当時を振り返った。

活動は被災地を訪問し、食事を提供するだけにとどまらない。都内のホテルでチャリティ食事会を開き活動資金を集めることで、被災地と支援地の心のつながりを生み出している。日ごろから料理を味わう側の視点を意識し腕を振るっている、料理人の心配りが垣間見えた。

「継続が大切だ」。登壇者が共通して語った言葉だ。東日本大震災の被災地を繰り返し訪れているからこそ、風化に悩む現地の思いが分かるのだろう。加えて、今回の震災は原発事故に伴う農産物の風評被害の問題もある。コンテストなどの取り組みは風評払拭に力を発揮するはずだ。

会場には、会の幹事を務める名だたるシェフが勢ぞろいした。被災地支援への強い思いが伝わる会見だった。

山崎 理史
福島民報東京支社編集副主任



下:福島産の白桃を使用したタルト(左)とムース。桃の甘みが生かされたスイーツで幸せなひととき



*参加費計5万円は日本赤十字社福島県支部に寄付しました。

フランス映画「天皇と軍隊」(渡辺謙一監督)は、天皇制、侵略戦争と敗戦、マッカーサーの占領、自衛隊、再軍備、改憲論議という重いテーマを扱いながら、貴重な記録映像と幅広い関係者のインタビュアーによって、問題点がわかりやすく構成されている。

映画のナレーションは「1条と9



©英王立戦争博物館



(8.4) 天皇と軍隊

憲法1条と9条の関係が見える

条はコインの裏表」と表現した。明治憲法で陸海軍の統帥権を持っていた国家元首たる天皇は、敗戦後、憲法第1条によって「象徴天皇」に変わり、第9条の戦力放棄によって統帥権そのものが消失した。マッカーサー連合国軍最高司令官が日本占領に当たって天皇制を存続させたことと、非武装化とは裏表の関係だった。

「戦後レジーム」とは、象徴天皇(1条)と戦争放棄(9条)の一体構造にほかならない。

もともとはフランスとドイツで2009年に放映されたテレビ・ドキュメンタリーだったと知って意外だった。当時、欧州ではフランスなどの極右政党台頭が目立っていた。日本も第1次安倍晋三政権下で「戦後レジームからの脱却」が論じられており、日本の右翼思想への関心が高まったのだろうか。日本公開は今年8月が初めてだが、映画のテーマは第2次安倍政権下で、より現実的になった。

上映会場にみえた渡辺監督によれば、日本についての知識を持たない欧州の視聴者が対象だったので、戦前の天皇制から現在の天皇制、今後の改憲の動きを「通史」の形式で紹介した。日本を知る基本資料として仏、独、米の図書館がDVDを備えたというが、日本人が見ても、改憲論の根源にさかのぼって頭を整理することは有益だろう。渡辺監督は、9条改憲をすれば必然的に天皇の国家元首化が始まると憂慮していた。

毎日新聞出身 金子 秀敏

10月3日(土)から東京・ホレホレ東中野でアンコール上映のほか、地方でも公開予定

「年初経済見通し」からピケティ、翁長、戦後70年、パラリンピック「会見見録」は資料の宝庫です

今年1月から8月までに左記15本の「会見見録」を作成しました。ゲストの発言から質疑応答まで全てを文字起こした記録版です。現在、723本が公開されています。クラブのウェブサイトでお試しください。

* * *

●長妻昭候補、細野豪志候補、岡田克也候補(1・8 民主党代表選立候補者討論会)

●柯隆・富士通総研経済研究所主席研究員「中国の社会経済とその行方」(1・19 研究会「2015年経済見通し」)

●ロバート・フェルドマン・モルガン・スタンレーMUFJ証券チーフエコノミスト「デフレからの脱出アベノミクスを信用するが確認も必要」(1・28 同研究会)

●トマ・ピケティ・仏経済学者「不平等の今後はわれわれの政策選択にかかっている(日本語・英語)」(1・31)

●大沼保昭・明治大学特任教授、朴裕河・世宗大学教授「議論の両極化に抗して」(2・23 研究会「慰安婦問題を考える」)

●宍戸常寿・東京大学大学院教授「ネット・法・倫理」(3・24 記者ゼ

ミ「ネット時代のマスメディア」)

●武井彩佳・学習院女子大学准教授「両者が実をとり現実的な判断を繰り返し達成された」(4・22 研究会「ドイツの戦後和解」)

●川喜田敦子・中央大学教授「国際歴史対話は、対話から出てくる問題提起に国内がどう向きあっているかが、問われる」(4・24 同研究会)

●佐藤健生・拓殖大学教授「戦前とは異なる国家の証しを立て続ける」(5・13 同研究会)

●翁長雄志・沖縄県知事(5・20)

●山崎拓・元自民党幹事長「自衛隊よ、汝警察犬となるなかれ」(5・21)

●篠田正浩・映画監督「私の戦後70年、ゾルゲの場合」(6・1)

●ベニグノ・アキノ・フィリピン大統領「西フィリピン海での軍備増強を受け、両国は海洋安全保障分野に積極的に関与すべきである(日本語・英語)」(6・5)

●村山富市・元首相、河野洋平・元官房長官「なぜ、どういう気持ちで、我々は2つの談話を出したのか?」(6・9)

●鳥原光憲・日本障がい者スポーツ協会会長、日本パラリンピック委員会会長「全競技場で観客を満員に2020パラリンピックの意義と課題」(8・5)

首相官邸クラブ

松本 賢志(時事通信社)

歴史見詰め直した暑い夏 「70年談話」取材に奔走

首相官邸詰めめの記者にとつて、今年8月はことさら暑い夏となった。九州電力川内原発の再稼働や、米軍

普天間飛行場(沖縄県宜野湾市)の名護市辺野古への移設作業一時中断などのニュースが相次いだ。

その中でも、とりわけ安倍晋三首相が同月14日に公表した「戦後70年談話」は、今夏最大の取材テーマだった。2014年末の衆院選直後から、安倍内閣をウオッチする上で、70年談話を主要な取材ポイントに位置付けてきたが、官邸サイドによる情報管理などもあって、取材上のハードルは高かった。

会見直前となった談話配布

首相は国内外の一部で「歴史修正主義者」と見られる向きもあり、政権発足当初から70年談話は注目を集めていた。

特に、談話の内容次第では、中国や韓国といった諸外国との関係に影響を及ぼすことは必至で、談話をめ

ぐる取材合戦は次第に過熱していった。

今年年初に伊勢神宮に参拝した際の記者会見での発言や施政方針演説などから、70年談話のヒントを読み取ることはできないか。筆者は首相の米国出張にも同行したが、米議会両院合同会議での演説についても、一つ一つの言葉に細心の注意を払った。

しかし、70年談話作成に関わっていたのは首相周辺のごく一部に限られ、加えて関係者の口は一樣に重く、取材は苦労が多かった。実際、談話



70年談話を公表する安倍晋三首相(8月14日/時事通信社提供)

公表の直前に、報道内容がマスコミ各社で割れる場面もあった。戦後50年の村山富市首相談話のキーワードの1つで、安倍首相談話にも盛り込まれるか焦点だった「おわび」について、ある社が「盛り込まれない」とする一方で、一部の社は「おわび」も含む村山談話の4つのキーワード全てが明記されると報じた。

取材を通じて感じたことは、安倍官邸は日頃から、省庁人事などで情報の保全を重視しているが、特に70年談話の取り扱いについては、ナイーブになっていたことだ。政権幹部らに個別に接触しても、事前に談話の内容が漏れることを警戒していることがうかがえた。

そうした事情からか、談話が報道各社に配布されたのは、8月14日午後6時から首相が行った記者会見の2、3分前。ぎりぎりまで談話の公表が控えられたため、すでに首相官邸の記者会見場に入っていた筆者を含め、記者の多くはわれ先にと手を伸ばし、懸命に談話を読み込むことになった。

談話公表後こそ注視

世界恐慌、満州事変、国際連盟脱退―。安倍談話は、日本が敗戦に至る過程を振り返り、「進むべき進路

を誤り、戦争への道を進んでいった」と総括。さらに、首相は同14日の記者会見で、「8月は、私たち日本人にしばし立ち止まることを求める。今は遠い過去だとしても、過ぎ去った歴史に思いを致すことを求める」と述べ、歴史を直視する意義を強調した。

暑い8月は過ぎ去ったが、安全保障関連法案をめぐる参院を舞台にした与野党攻防や、自民党総裁選、その後に首相が踏み切るとみられる内閣改造などが控え、永田町ではまだまだ「暑い」日々は続く。

70年談話をめぐる報道は、14日の首相記者会見がピークとなったが、談話の発表が終わりではない。談話を踏まえ、安倍内閣がどのような近隣外交を展開していくかが問われている。「私たち日本人は、世代を超えて、過去の歴史に真正面から向き合わなければならない」。安倍談話でうたわれたこの一節が心に残る。

70年談話は、歴史を見詰め直す契機となったが、これからも、安倍内閣が談話を踏まえて、内政、外交両面でのどのような取り組みをしていくのか注視していく決意だ。

まつもと・たかし▼1996年入社 神戸総局 外務省クラブなどを経て 2015年7月から官邸クラブキャップ

2016年参院選合区

日本中からヒトとカネが集まる東京。その象徴ともいえる六本木ヒルズの事務所です。7月、升永英俊弁護士がインタビュにに応じた。

「1票の格差をめぐる訴訟で」高知にとつて余計なことをするな
って言いたいんでしょ？ 私が訴えているのは、憲法どおりの国に
なきやいかんというだけです」

200億円の賠償金で話題にな
った青色LED訴訟を手掛けるな
ど、知的財産権の専門家として知
られる敏腕弁護士は、近年「1人
1票実現運動」に傾倒し、選挙の
たびに訴訟を起こしている。

しかし、憲法が投票価値の平等
を求めているとしても、国会議員
の地域代表の位置付けを全面否定
していいのか。高知県と徳島県は
昨年の衆院選で小選挙区の定数を
減らされたばかりで、今度は参院
選も合区だ。人口比例で都市部の
議員ばかり増えれば、地方の切り
捨てが進むだけではないか

高知

そんな問いかけに、升永氏は「憲法には地方利益の

池 一宏 (高知新聞社)

「地方vs憲法」でいいのか

保護なんて一行も書いてないよ」と不機嫌そうに答えた。衆院選をめぐる判決を挙げて「国会議員に地域代表的要素はないって最高裁が言っちゃったんだから。高知の人がガタガタ言ってもしょうがない」とも言った。

最高裁判決は、小手先の選挙制度改革に終始する政治に司法が業を煮やした結果ではある。全ての国会議員が地域の声を国政に反映させるために日々努力しているかどうかは、私も疑問がある。

それにしても、升永氏の「憲法原理主義」のような主張を聞きながら、頭から離れなかったのは「地方VS憲法」の対立構図だ。

升永氏は「1人1票でなければ違憲だ」として来夏の参院選直後にまた訴訟を起こすという。仮に「違憲状態」の判決と数合わせの選挙制度改革が繰り返されれば、次の合区候補は秋田と山形、石川と福井、佐賀と長崎…。

国の最高法規によって地方が追い込まれている気がするの、私の考え過ぎだろうか。

いけ・かずひろ▼1994年入社 2015年から報道部

徳島

改正公職選挙法が成立し、来夏の参院選は高知県との合同選挙区を舞台に論戦が繰り広げられることになった。

徳島新聞は法成立前から社説で「合区問題」について再三取り上げ、反対の姿勢を明確に打ち出してきた。主な理由は「1票の格差」は正
は必要だが合区は抜本改革に程遠い「地方の声が国政に届きにくくなる」などだ。

法案が参院本会議で可決された7月24日組みの社説では、これまで都道府県単位だった選挙区を統合することを「小手先の数合わせ」と指摘し「強い憤りを覚える」と厳しく批判した。

今回の選挙制度改革は、安倍政権の看板施策である地方創生の流れに逆行するもので、県知事をはじめ市町村長からも異口同音に反対の声が聞かれた。一般県民の声も「格差是正は必要だが合区は反対」との意見が主流だったように思う。

とはいえ合区の導入は正式に決まり、来夏の選挙は両県にまたがる取材活動を進めなければならない。取材陣にとつても初めての体験で、現場の記者の間では不安と緊張感が高まっている。最大の不安要素は選挙区の拡大による取材効率の悪化。県

武田 浩文 (徳島新聞社)

広がる選挙区 取材態勢どうする

庁所在地をつなぐ高速道は整備されているが、それでも2時間半近くかかる。選挙区の端から端までは5時間は超すだろう。

選挙戦では、有権者の投票行動が政党や政策ではなく「徳島代表か、高知代表か」という視点に左右されないかという点が最も懸念される。それは両県の新たな対立を生む恐れもはらんでいる。

同じ四国でありながら、四国山地に隔てられた地理的要因もあり、古来から行き来も少なかった。それぞれが独自の文化を育み、歴史や言葉、政治風土も異なり、互いに「近くて遠い存在」だった。記事の「書きぶり」には細心の注意を払わねばならないと感じている。

紙面展開で「高知新聞との連携が不可欠」との思いを強くしている。同紙の山岡報道部長をはじめ政治担当記者と8月7日に早速、第1回の打ち合わせを行い、随時、記事交換を進めていくことなどを申し合わせた。両県民読者のため、有意義な紙面作りに努めていきたい。

ただ、ひろふみ▼1992年入社 2014年4月から政経部長

リオ五輪まで1年

原口秀一郎（NHKサンパウロ支局）

準備の遅れ、環境問題…課題山積だが「遺産」に期待も

8月5日、リオデジャネイロ市バツハ地区の五輪パーク。大会組織委員会では、五輪1年前の記者会見を、あえて建設中の競技会場の中で開いた。パエス市長は競技会場ごとに工事の進捗率を示し、準備が順調に進んでいると胸を張った。

私がリオで取材を始めて1年余り、この間に工事がめざましく進んだのは事実だ。一方で、その発表を額面どおりに受け止められないのも事実だった。昨年のサッカーのワールドカップ、間に合うと言い続けられたスタジアムの工事は一部で最後まで終わらずに開幕を迎えた。仮設スタンドに観客を入れたテストができず、砂袋を積んで強度のチェックが行われたスタジアムもあった。こうした記憶が鮮明に残っているからだ。リオ五輪では28競技306種目が行われる。新規に建設する競技会場は14。さらに観客の輸送のカギを握る地下鉄やバスの専用レーンなど、急ピッチのインフラ整備が進められ

ている。ワールドカップとは違い、ほとんどの会場が大会期間中フル稼働し、同時並行で競技が行われる。オペレーションを機能させるためには、何よりも事前のテストが重要になる。会場が完成しさえすればいいというわけではない。

その危機感から準備の遅れが課題と現地からレポートしたが、不安はすぐに的中した。自信満々だった会見の数日後、工事の進捗率が98%とされたゴルフのテスト大会の延期が決まったのだ。新設会場のテスト大会はほとんどが来年1月以降で、地



バツハ地区の五輪パーク 休日返上で建設が続いている(筆者提供)

下鉄の開業は本番の直前と、テスト大会には間に合わない。頭の中では、新国立競技場の建設が白紙に戻った東京大会のことも重なって見えた。

セーリング会場となる湾の汚染も深刻な問題だ。AP通信が地元大学に依頼した調査で、複数のウイルスが高い濃度で検出されたと伝え注目度が一気に高まった。私自身、生活排水の強烈な臭いは忘れられない。組織委員会は「定期的に調査し影響はない」とするが、安全な環境なくして世界最高の戦いなど期待できない。テスト大会でも選手から不安の声が聞かれた。こうした不安を取り除く真摯な取り組みが求められる。

東京五輪への皮肉？ 「No White Elephant」

課題ばかりを挙げてきたが、2020年東京五輪を控える日本にとって参考となる事案もたくさんある。7月にパエス市長にインタビュールた際、痛烈な皮肉を言われた。市長は準備状況や治安など課題への取り組みを聞く私に「リオ五輪のモットーは無駄を省くこと。すべての競技会場を20億ドル(約2500億円)で建設している」と強調した。もちろん念頭にあるのは、当時ブラジルでも関心が高まっていた新国立競技

場の建設費2520億円だった。市長は「大事なのは選手が躍動するグラウンド、そして観客のための快適なスタンドだ。華美なデザインや装飾は要らない」と続け、最後に「No White Elephant (捨てにくいやつかいもの)」という言葉で締めくくった。この言葉は、五輪開催を国民の重荷にしてはいけないという強い決意の表れでもあった。

五輪の取材をしていると必ず聞かえてくるのが「レガシー」「遺産」という言葉だ。競技会場や交通機関など五輪を開催することで生まれるインフラというレガシー。世界トップレベルの選手が躍動する姿をまぶたの奥に焼き付け、人の心に残る記憶というレガシー。スポーツを通して子供たちの目標が生まれ、子供たちの未来を変えるかもしれない教育というレガシー。南米初の五輪を経験するリオが、どういうレガシーを築いていけるのか、今の時点では課題とされることも、それを乗り越えることでレガシーが生まれてくるのだと思う。五輪を将来にどう生かせるか、真剣勝負に挑むリオの1年を、これからも熱く取材していきたい。

はらぐち・しゅういちろう▼2000年入局 報道局スポーツ部 アメリカ総局を経て 2014年からリオ駐在記者



被災地通信⑦ 気仙沼市・南三陸町

被災路線にBRT導入 “鉄路問題”前進するか

小野寺英彦 (三陸新報社)

東日本大震災から4年半を迎える。気仙沼魚市場へのカツオなど活発な水揚げが続き、復興に向かって確実に歩んでいる。震災以降続いている国内外からの支援のおかげであり、あらためて感謝したい。その一方で、気仙沼市、南三陸町でいまだ約1万人が、仮設住宅暮らしを余儀なくされており、住宅再建など思うように進んでいないのが実情である。

大震災では気仙沼市で1136人、南三陸町で620人が死亡し、今も行方不明者は、気仙沼市で221人、南三陸町では212人いる。



鉄路に代わって運行されるBRT (三陸新報社提供)

月日が経つほどにしつかり前を向いて力強く歩む人がいる一方で、「節目節目にあの時がよみがえり、つらくなる。そんな思いが年々、強くなる」という被災者の声も聞く。

巨額費用と利用者減 JRは復旧断念

進まない住まいの再建や、賛否が分かれている防潮堤問題など課題は尽きないが、今、大きなテーマとなっているのは、被災したJR気仙沼線と大船渡線の復旧問題である。震災直後、鉄路を復旧させるとしていたJR東日本が7月下旬、鉄路復旧を断念。仮復旧で運行しているBR

T(バス高速輸送システム)を継続運行させる方針を示したのだ。

ネットとなったのが、主に巨額な復旧費と利用者の減少。復旧費は気仙沼線だけでも700億円とされ、JRは原形復旧費300億円は出せても移設分400億円は、公費負担を求めた。しかし国は、JR東日本が赤字企業であることなどを理由に国費投入を認めず、JRは断念せざるを得なかったようだ。

JRの方針に南三陸町の佐藤仁町長は「これ以上まちづくりを遅らせるわけにはいかない。鉄路復旧は現実的ではない」と受け入れる意向を示した。これに対し気仙沼市の菅原茂市長は、特に気仙沼線の復旧を重視する姿勢をとっている。明治、昭和の三陸津波からの復興のシンボルとして全線開通した鉄路の歴史的経緯を重視するとともに、気仙沼線がこれまでに担ってきた観光振興、地域振興策などの代替案をJR側が示さなければ、鉄路復旧の旗を降ろす考えはないようだ。

意見分かれる住民 新しい地域振興策も必要

住民の間でも賛否は分かれている。利便性がどんどん高まるBRTに「運行本数が少ない鉄路に比べ、

本数も多く便利」駅などがもつと増えれば利用者は増える」と歓迎。人口減や利用者が減少している現状に「鉄路断念はやむを得ないだろう」という声は多い。一方で「先人の血と汗で築いた鉄路をなくすわけにはいかない」大量輸送、都市部へのアクセスなど鉄路はBRTより有利」と復旧を望む声は根強くある。

棚上げが続いた鉄路問題にJRが方針を示したことで、ようやく議論が前に進みそうだ。JRはBRTの専用道比率をさらに高める意向で、鉄路復旧はかなり厳しいという見方が大半のようだ。交通弱者の足の確保、仙台へのアクセス、観光客誘致など、今後、持続可能な公共交通をどのように整備して地域振興を図っていくのか具体的な検討が必要だ。観光など幅広いノウハウを持つJRの知恵も借りながら新たな地域振興策を生み出さなければ衰退の一途をたどりかねない。

震災前からの人口減は歯止めがかからず、先行きに不安として重くのしかかる。体力が弱くなった産業基盤の回復、住宅、事業所の再建など、これからが復興の正念場である。

おのら・ひでこ▼1984年入社
市政 水産担当などを経て 2012
年4月から編集局長

経済記者の醍醐味 「論理的な事件」の数々を取材して

村田 泰夫



むらた・やすお
1945年生まれ 69年朝日新聞入社
経済部で財政金融農政財界などを担当 経済部次長
論説委員 編集委員を経て 2005年退職
その後 農林漁業金融公庫理事 明治大学農学部客員教授を歴任

新聞記者の醍醐味は事件取材にある。特ダネには推理小説さながら、いやそれ以上の背景やエピソード、そして人間関係が潜んでいる。事件取材は社会部の専売特許だと思いついてる人がいるとすれば、それは違う。私は経済記者一筋だったが、経済部の担当する分野でも、事件取材が中心を占める。

◆幻の「富士・三和銀行合併」

私が第一線を走り回っていた時代は経済事件の連続だった。とくに思い深いのは、1970年代後半から80年代初めにかけて金融を担当していた時だった。もう40年も前のことだ。

「書かなかった話」というより、むしろ「書けなかった話」では、幻となった「富士・三和銀行合併」が

ある。東京本社で金融部で金融（日銀記者クラブ）を担当した後、79年7月、大阪本社に異動した。

大阪でも金融を担当し、当時の三和銀行頭取の赤司俊雄さんを知った。三和銀行は個人顧客を大切にするピープルズバンクを基本理念としていた。赤司さんは、全身全霊でピープルズバンク路線を推し進めていて、その経営姿勢に私は心酔していた。

ある晩、タクシーで赤司さんの自宅に夜回りしていた時のことだ。ウイスキーをこちそうになりながら、業界の再編成の話で盛り上がり、富士銀行との合併構想を聞いた。体が震えた。富士銀行の当時の松沢卓二頭取と話がついている。しかも事実上の「合併準備協議会」のような会合が、両行頭取の腹心らによって定

期的に開かれていることも、その後の取材で確認できた。

関西を地盤として個人取引に強い三和銀行。一方の富士銀行は、関東を地盤とした芙蓉グループの中心的存在。規模もほぼ同じで、どちらかが吸収されるといった関係にならないのも都合がよい。合併すれば業界トップになる。まさに、お似合いのカップルだったのである。

バブルの崩壊で経営危機に直面したわが国の金融界が、相次いで合併を余儀なくされ、メガバンクを誕生させたのは2000年以降だ。住友はさくら（旧三井）と「三井住友」に、富士は第一勧銀・興銀と「みずほ」になった後、三和は東海と合併し「UFJ」になった後、三菱東京と「三菱東京UFJ」に再編された。

いずれも、バブル崩壊の後始末を

つける守りの再編成だった。しかし、その20年前の1980年ごろの富士・三和合併交渉は、グローバル化をにらんだ攻めの金融再編成だった。富士銀行にとっては、第一勧銀に奪われていた預金量トップの座を奪い返せるし、三和銀行にとっては手薄だった関東でも地盤を築ける。もし、富士・三和の合併が成就していれば、わが国の金融地図も大きく変わっていただろう。

この合併交渉は、監督官庁である大蔵省が巨大銀行の誕生に強い難色を示してご破算になったといわれる。記事化のゴースインをもらうことになっていた三和の赤司頭取が任期切れで退任したこともあって、大特ダネは幻に終わった。当時、大阪経済部で一緒に金融を担当していた後藤尚雄さん（現・朝日新聞常務取

締役」と、「特ダネを打ってあげれば、日本新聞協会賞は間違いなしだったのにな」と昔を懐かしがっている。

◆銀行は企業ニュースの宝庫

「経済事件記者でありたい」と思っていた私にとって、金融担当はうってつけだった。あらゆる企業取材に首を突っ込めるからである。

市場の動きが金利を決める自由金利の今と違って、規制金利時代の当時は、公定歩合の変更を抜くことが、日銀担当記者に期待されていた使命だった。日本経済の景気動向をウォッチし、政府・日銀がどのような金融政策に出るか、マクロ経済を追うのである。

同時に、民間企業の経営危機や業界再編、首脳人事など、個別企業のニュースを追う取材も、金融担当記者の大切な役割の一つだった。

だいぶ様子が違うようになったが、当時は今以上に銀行が企業の命運を握っていた。金融が逼迫していたので銀行の地位が高かった。また、銀行が系列グループ企業の安定株主になっていたので、個別企業から重要な情報は、メインバンクに必ず入っていた。

主な産業には、それぞれ担当記者が張り付いている。私も自動車、鉄

鋼、食品業界などを担当したことがあるからわかるが、それぞれの企業的首脳陣に取材しても、特ダネはなかなか取れるものではない。ところが、その企業のメインバンクに当たると、ポロツと取れたりする。

記者は一匹狼のように動くことが多いが、私はチームを組んでの取材が得意だった。サッカーでいえば、アシスト役を積極的に買って出た。野球でいえば、バント役をいとわなかった。業界担当記者と、よく情報交換をした。合併、倒産、トップ人事など、業界ごとに懸案事項を一覧表にした「マル秘メモ」を作成、常に持ちながら夜回りしたものだ。

◆仮説を立て実証する作業

そんな中、当時としては史上最大級の倒産である「永大産業倒産事件」が起きた。プレハブ住宅の大手だが、住宅ブームの終焉とともに経営が行き詰まった。メインバンクの第一勧業銀行の融資担当役員の自宅を連日夜回りし、「重大局面に、更正法適用の申請も」という特ダネを打った。78年2月19日の朝刊だ。「危機回避策検討」という逆方向の記事を載せた同日付けのライバル紙が、私の一面トップ記事をいっそう引き立ててくれた。

一息する間もなく起きたのが「佐世保重工事件」である。78年3月から6月にかけての「80日間の救済劇」だった。朝回り夜回りを一日も欠かさず、紙面では終始、事件の経緯をリードすることができた。今から振り返れば、官民なれ合いの「日本株式会社」終焉の断末魔をあぶりだす経済事件だった。

特ダネは、どうやって取るのか。基本的には取材相手から教えてもらわないと特ダネは取れない。合併や業務提携など企業にとって前向きなニュースは、当の企業からリーク（意図的な情報提供）されることもある。しかし、企業倒産など当事者が隠したがるニュースはリークしてくるはずもない。

「教えてくれない」ネタを取る方法は、ないわけではない。相手の立場に立って、そういう状況ならどう考えるか。どんな対策を取るか。記者なりに考えて当事者につけてみるのである。

外れていけば、「こういう別の状況がある」とか、「その対策では一方でこういう問題が出てくる」とか、教えてくれるものだ。出直して正解探しをやり直し、翌日の夜回りですべてみる。当たりだったら「おぬしできる」と思ってくれる。

全てをはっきり話してくれなくても、否定せずに記者を激励してくれる言動を得られるようになれば、勝利は手にしたようなものだ。

実際は、禅問答の連続である。わかったようでわからない会話の連続だから、こちらの思い込みが激しいと失敗する。心を空にして相手の立場になりきらないといけない。

経済事件は社会事件と違って、交通事故や通り魔殺人事件のように、予告なくある日突然起きる事件はまらずない。経済事件には必ず理由があり予兆がある。「経済事件は論理的な事件である」ことに気づいてから、事件取材が面白くなった。

推理力が勝負だ。事態がどういう論理で動いているか知ること、特ダネに近づけるからだ。仮説を立て、それを実証していく。この過程がたまらなく面白い。綿密な取材を積み重ねて、取材相手を追い込んでいくのは快感ですらある。幻となった「富士・三和銀行合併」も、論理的に考えて当事者につけて引き出した。私が第一線にいた時代と比べ、グローバル化が進んだこともあって、経済の動きは複雑さを増している。経済担当の若い記者たちは、特ダネ競争で熾烈な戦いを繰り広げていることだろう。健闘を祈りたい。

私が会った
あの人

「あつちで覚えた」 死刑から再審無罪の免田栄さん

高峰 武（熊本日日新聞社）

熊本市内の居酒屋にいつものメンバーが集まった。会の真ん中は免田栄さん。1983（昭和58）年7月15日、わが国初の確定死刑囚から再審無罪になった人である。囲んだのは熊日のほか民放、通信社の記者、元記者などだ。

免田さんは今、奥さんの玉枝さんと福岡県大牟田市に住む。生まれた熊本ではなく、熊本と境を接する大牟田市という場所が、古里との微妙な距離感を示している。

免田さんが熊本県人吉市で起きた強盗殺人事件の容疑者として逮捕されたのは49年1月。自白中心から物証重視に変わった新刑事訴訟法が適用された重大事件第1号となった。原第一審第3回公判で明白な否認に転じたが52年に死刑が確定。6度目の再審請求で83年に熊本地裁八代支部で無罪判決を受け、確定した。

事件の教訓は幾つもあるが、例えば誤捜査、誤判について考えてみたい。免田さんの場合56年、第3次再審請求で、熊本地裁八代支部の西辻孝吉裁判長はアリバイを認め、再審開始決定を出した。福岡高裁は「法の安定を損なう」として取り消したのだが、あの時、再審が開始されておれば、と思う。冤罪と後に指摘される事件をよくよく見れば、捜査段階や下級審で、容疑者あるいは有罪とするには強い疑問符が付く判断がある。なぜそれが生かされなかったか。最高検は86年、免田、財田川、松山の死刑囚再審無罪3事件を検討する内部報告書を作った。これを読めば、再審判決に負けず劣らず、免田さんがなぜ無罪なのか分かる。報告書は「無期限秘」とされている。これが公表され国民の目に触れば、事件を見る目も随分違うものになると思う。残念である。最高検幹

部が「問題があるケースは私たちがなりに対処しています」と語ったことがある。要は検察なりの判断で死刑を執行していない、ということのようだ。しかし、袴田巖さんのケースを見ても分かるように、拘留があまりにも長くなっているのではないか。

免田さんは直感の人だ。ストリートに日本社会を表現する。「日本人権は虹のようなもの。近づくと消えてしまう」「日本人は公の犯罪に弱く、私の犯罪に厳しい」

無罪判決を受けてしばらくたったころ。「こんな手紙が来た」と言っていて見せてくれたのが、ある著名事件で獄中にあつた男性からの手紙だった。検閲済みの印のある、無実を訴える長い手紙。最後は具体的な金額



免田栄さん（左）と筆者（2015年7月、熊本市内で）

を挙げて資金援助を求めている。「返事はどうしましたか」と聞くと、「闘いはあくまで自分1人でやるもんですよ、と書きました」とさりとらと言った。芯には一本、厳しいものを持っている。

1925（大正14）年生まれの免田さんは今年11月4日、90歳。卒寿だ。しかし、人生で最も豊かであるべき青、壮年期は獄中だった。實際生まれたのは11月3日。明治天皇の天長節で、畏れ多いと1日ずらしての届けとなったという。そんな時代から生きてきたのが免田さんである。

居酒屋の後はカラオケになった。免田さんの曲を入れていた同僚が「あれ」と声を上げた。「みんな別れの歌だなあ」「哀愁列車」「赤いランプの終列車」「達者でナ」などだ。店を出てから聞いてみた。「どこで覚えましたか」。返事は短かった。「あつち」

獄にあつて、どんな思いで別れの歌を覚えたのかと思い、しばらく言葉が出なかった。

（たかみね・たけし 論説主幹）
次号は丸山貢一さん（信濃毎日新聞）にバトンが渡ります。

マイBOOK マイPR

■朝鮮半島で迎えた敗戦 在留邦人がたどった苦難の軌跡(城内康伸・藤川大樹著)

藤川 大樹(東京新聞外報部)

視点を変えて大戦を見る 数多くの証言と膨大な史料で事実を忠実に綴ったノンフィクションです。

本書では、1945年8月15日を物語の起点としました。ソ連軍の進駐、飢餓と発疹チブスの蔓延、そして決死の脱出行。朝鮮半島や満州で暮らしていた在留邦人の苦難は、日本が「終戦」を迎えた、まさにその日に始まりました。

絶望的な状況の中、在留邦人の救出に命を懸けた人々も描きました。元政治犯や遊郭出の女性など、無名の人々による無私の献身です。

戦後70年の節目に、少し違った視点で先の大戦を見ることができると思います。



書店大月 1728円

■ドルへの挑戦—Gゼロ時代の通貨興亡—

岡部 直明(日本経済新聞出身)

浮き沈みする国際通貨 戦後70年、ドル基軸の国際通貨体制は挑戦にさらされる。ベトナム戦争、イラク戦

争など米国の戦争がドルの信認を揺るがせた。ドルへの挑戦者も難題を抱える。ユーロはギリシャ危機で構造問題に直面する。中国人民元は国家資本主義の壁にぶつかり、海洋進出で国際不信を招いている。

国際通貨は戦争で沈み、平和で浮かぶ。通貨と国際政治の接点に立ち、ブレトンウッズ体制以来の歴史の教訓を示し、G

ゼロ時代の通貨興亡を展望する。

■総理の演説 田勢 康弘(日本経済新聞出身)



日本経済新聞出版社 1944円

64本から感じた匂い

リンカーンやケネディの演説は知っていても歴代総理の演説を記憶している日本人は珍しいだろう。新聞の社説同様、床の間の天井なのである。すなわち、ないが格好がつかないが誰も見ない。そんな総理の演説を64本読んでみた。むしろ、総理が自分で演説を書いたりほしくない。いずれの演説も他人が書いているのだが、不思議にその総理の特徴や時代の匂いがしてくる。演説の格調が低くなってくるのは社会の無教養化と無縁ではない。

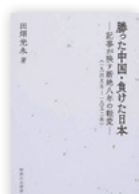


バジコ 2592円

■勝った中国・負けた日本—記事が映す断絶八年の転変—(一九四五年—一九五二年)

田畑 光永(テレビ出身)

戦後8年、両国民は相手をどう見ていたか 大威張りしていた軍国日本は中国に負けた現実をどう考えたか、両国の国民は相手をどう見たか、どうして日中間には普通の関係が戻らなかったのか、…いつまでたってもややこしい日中関係を戦後の「現場」に立ち戻って、当時の人々に直接語ってもらいました。例えば玉音放送の1カ月後、日本の首相は「中国へ謝罪使を特派したい」と言い、満州事変を起こした石原莞爾は「(満洲の)独立に協力した在満中国人に甚だ濟まなかつたと考えてゐる」と



御茶の水書房 4968円

■アメリカに女性大統領は誕生するか

蓮見 博昭(時事通信出身)

「女性上位社会」と民主主義 2016年11月に行われるアメリカ大統領選挙では、民主党のヒラリー・ロダム・クリントン女史が史上初の女性大統領に選出され、就任することが確実視されている。女性上位社会の本拠として自他共に認めてきたアメリカで、実際には男性優位がまか

り通ってきた実態を多方面から検討し、結局この国では民主主義が十分機能してこなかったのではないかと、「その国が発展していくかどうかは女性の扱い方を見ればわかる」というオバマ大統領の言葉の真贋が問われているのではないかと、と結んでいる。



日本評論社 1944円

■自分が変わった方がお得という考え方—日本新時代のキーワード—

三橋 規宏(日本経済新聞出身)

変化を味方につけよう 元氣いっぱいだった日本は90年代に入って、突然「失われた20年」と言われるような長期衰退の迷路にはまり込んでしまいました。時代の変化に積極的に対応してこなかったためです。高度成長期の居心地の良さから抜け出すことを恐れ、日本全体がガラパゴス化してしまつたわけです。個人も企業も国家も過去に引きずられず思いついて変化に対応すれば、少子高齢化を伴う人口減少でさえ味方につけることが可能です。本書のタイトルにはこんな願いが込められています。



中央公論新社 1728円

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■日本医学ジャーナリスト協会 例会

日本医療研究開発機構理事長の末松誠氏(前慶應大学医学部長)を招いて開催した。今年4月に創設された同機構の業務や今後の展望について話を聞いた。(8.5 会見場)

■農政ジャーナリストの会 研究会

「戦後70年の食と農 ~転換期にどう向き合ったのか」をテーマに全4回の連続研究会を行っている。2回目は日本経済新聞出身の岸康彦氏が「記者の視点から描く鳥瞰図」と題して講演した。同会のウェブサイトで見ることが出来る。(8.7 大会議室)

■新しい歴史教科書をつくる会 記者会見

同会の杉原誠四郎会長らが会見した。安倍晋三首相の「戦後70年談話」発表を前に、一方的に日本を断罪する文脈で「侵略」や「謝罪」といった文言を使わないように求めた。(8.10 大会議室)

■富岡隆夫さんを偲ぶ会

朝日新聞社で経済部長、初代アエラ編集長、取締役文化企画担当を務め、昨年夏に亡くなった富岡隆夫さんの没後1年に、友人・知人らが遺族と共に故人を偲んだ。(8.10 会見場)

■歴代首相に安倍首相への提言を要請するマスコミOBの会 記者会見

同会は「マスコミ九条の会」と日本ジャーナリスト会議(JCJ)が事務局を務める団体で、安保法案に反対の立場をとっている。新聞、雑誌、放送などのOBら51人が呼びかけ人となり、存命の首相経験者12人に要請文を発送。細川護熙、羽田孜、村山富市、鳩山由紀夫、菅直人の各氏から回答を得た。

会見で発表された提言は同日、安倍首相宛てに発送された。(8.11 会見場)

■放送人政治懇話会

テレビ・ラジオ局の現役・OBらが政治家を招き、定期的に勉強会を行っている。8月は浜田靖一衆議院平和安全法制特別委員会委員長を招いた。(8.26 大会議室)

■東京宝塚劇場公演「王家に捧ぐ歌」トークサロン

主催：東京メトロポリタンテレビジョン
元宙組トップ娘役の陽月華さん、元宙組スターの緒月遠麻さんをゲストに迎え、トークサロンを行った。この催しは東京宝塚劇場での公演観劇者が対象。サロンには毎回、宝塚歌劇団OGを招いている。(8.28 10階ホール)

新しいOB会員

■ **会田 弘継** (あいだ ひろつぐ) 1976年共同通信入社。ワシントン支局、論説委員長、特別編集委員など。現在、青山学院大学地球社会共生学部教授。



クラブの企画委員から同委員長と、長く会見設定側におりましたが、これからはフロアから参加させていただきます。なぜか現役記者時代より多忙な日々です。

■ **岩田 公雄** (いわた きみお) 1974年読売テレビ入社。マニラ支局長、解説委員長、特別解説委員など。現在、学習院大学法学部政治学科特別客員教授。



希望していた教壇に立つことになったが誤算があった。まず授業の予習に追われること、そして500人のレポートの採点に徹夜を含め3週間没頭したこと。第2の人生甘くはなかつた、今痛感している。

■ **江口 義孝** (えぐち よしたか) 1974年NHK入局。アジア総局長、国際部長、解説主幹など。2012年からNHKグローバルメディア取締役。現在、同特別業務主幹。



時間の許す限り、会見や講演会に出席したいと思います。当事者や専門家の話を聞けるのが、とても楽しみです。

■ **川口 俊樹** (かわぐち としき) 1974年中日新聞入社。電子電波本部長、東京秘書部長、テレビ静岡常務取締役など。現在、中日新聞東京本社電子電波担当付調査役。



地方テレビ局で8年を過ごす間に、この国はとんでもないことになった。今、何をなすべきか。まずは権力者の言葉を直接聞きたい。

■ **河村 常雄** (かわむら つねお) 1973年読売新聞入社。芸能部次長、編集局専門委員、読売文化センターなどで勤務し、2013年退職。



ささやかながら演劇評論活動を続けています。情報量拡大を求め入会を決めました。よろしくお願いします。

■ **関 正喜** (せき まさき) 1977年北海道新聞入社。浦河支局長、紋別支局長、本社編集委員、東京支社編集委員などを務め、2015年退社。



最後まで現場記者として原稿を書いてきた者の責任として、組織からは離れましたが、今しばらく勉強を続けようと思います。

■ **仙石 誠** (せんごく まこと) 1967年中日新聞入社。東京本社中部報道部長、事業局長、東京本社代表など。現在、同社相談役。



現役時代は忙しさにまかしてクラブ行事になかなか参加できなかった。手持ち時間のできた今こそ、クラブの提供する最先端情報を吸収する好機。「70の手習い」で見聞を広めたい。

レストラン* 価格は全て税込です

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 松茸懐石(10/30まで)

先付：柿白和え、菊花おひたし お椀：土瓶蒸し 鱧、松茸、銀杏 造り：鮪、勘八、鯛、秋刀魚 焼物：合鴨ロース松茸挟み焼きほか 煮物：海老芋、茄子、がんも、水菜、柚子 揚物：きのこ天ぷら 松茸、エリンギ、舞茸、椎茸、ししとう 食事：松茸ご飯 水菓子：季節の果物 グラス冷酒付き(5,400円) (板長：大井由光)

洋食 ロブスターコース(10/31まで)

秋刀魚のマリネ レモン風味 プティサラダ添え、コンソメまたはポタージュ、ロブスターテルミドール、胡桃と南瓜のタルト、パン、コーヒー付き(3,780円)。ランチ、ディナー(土曜日はランチのみ9階レストラン)ともにご利用いただけます。(シェフ：黒須修一)

東北の銘酒を9階レストランで

5月に当クラブで記者発表した「東北六県魂の酒まつり」が9月13日、東京国際フォーラムで開催されます。会見後に振る舞われて好評だった下記3品を、9階の和食レストランでお楽しみいただけます。これからも被災地支援として、東北の日本酒を提供していく予定です。

- ① 太平山 天巧 純米大吟醸(5,940円、秋田)
- ② 男山 酒未来 純米吟醸(3,780円、山形)
- ③ 夢の香 開当男山 特別純米(2,916円、福島)

HP更新情報 <http://www.jnpc.or.jp/>

■ 会見詳録 会見の全文文字記録版

- 「全競技場で観客を満員に 2020パラリンピックの意義と課題」鳥原光憲・日本障がい者スポーツ協会会長、日本パラリンピック委員会会長(2015.8.5)
- 研究会「ドイツの戦後和解」④過去との取り組みの日独比較「戦前とは異なる国家の証しを立て続ける」佐藤健生・拓殖大学教授(2015.5.13)

■ 音声アーカイブ(日付は会見日) **重要会見の音声録音**

- 竹入義勝 公明党委員長(1971.7.20)
- 海部俊樹 首相(1989.12.8)
- 緒方貞子 国連難民高等弁務官(1991.4.25)
- 細川護熙 日本新党代表(1992.6.12)
- 宮沢喜一 首相(1992.7.14)
- ブトロス・ガリ 国連事務総長(1993.2.18)
- 羽田孜 首相(1994.5.31)
- 橋本龍太郎 首相(1996.9.11)
- ジャック・シラク フランス大統領(1998.4.29)
- 江沢民 中国国家主席(1998.11.28)
- フン・セン カンボジア首相(1999.2.26)

クラブの電話 ダイヤルイン

- 和食レストラン(9階) ☎3503-2723
- 洋食レストラン(10階) ☎3503-2766
- 貸室予約・宴会打ち合わせ ☎3503-2724
- 受付 ☎3503-2721
- 会員事務 ☎3503-2727
- 経 理 ☎3503-2728
- クラブ行事への申し込み ☎3503-2722
- 会見申し込みアドレス kaiken@jnpc.or.jp

会員現況

- 法人会員：135社 ● 基本会員：746人 ● 個人会員：1,368人
- 法人・個人賛助会員：63社・142人 ● 特別賛助会員：95人
- 名誉・功労会員：12人 ● 学生会員：126人
- 計：198社・2,489人

第104回 日本記者クラブゴルフ会のお知らせ

秋のゴルフ会を下記の要領で開催します。
【日時】 10月20日(火)午前7時45分集合
【コース】 磯子カンツリークラブ(横浜市磯子区)
【スタート】 8時28分 OUTスタート 5組
【競技】 18ホール ストロークプレー (ハンデイクヤップ制)
【会費】 5,000円 **【プレー費】** 約23,000円
 初参加も大歓迎です。お問い合わせ、お申し込みは事務局の河野(3503-2764)まで。

メールアドレスの登録をお願いします

会合のご案内はメールが便利です。急な日時の変更・中止など、はがきでは間に合わないお知らせも、メールではすぐにお届けできます。お名前を明記したメールを下記にお送りください。OB会員の皆さまにもご協力をお願いいたします。

登録は右記アドレスまで kaiken@jnpc.or.jp

サカタインクス、東京ビッグサイトが入会

新聞用インキの製造・販売などを行っているサカタインクスと、2020東京オリンピックのメディアセンターを担う東京ビッグサイトの2社が、9月1日付で法人賛助会員として入会しました。登録会員は下記の方々です。

- サカタインクス株式会社
 上坂義明・専務取締役
 黒崎彰夫・新聞事業部東京営業部長
 株式会社東京ビッグサイト
 竹花 豊・代表取締役社長
 及川繁巳・代表取締役常務

<法人会員代表変更>

陸奥新報社 三上知見・代表取締役社長(旧・田付昭夫)

<訃報>

高橋正会員(中日新聞出身、82歳)が8月7日死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

9月の行事予定(9/3現在)

15㊤	15:00～16:30 9階会見場 記者会見 丹羽宇一郎・日中友好協会会長
18㊤	15:00～16:15 10階ホール 記者会見 ブルース・ストークス・ピュー・リサーチセンター国際経済世論調査部門ディレクター
25㊤	15:00～16:00 10階ホール 記者会見 門川大作・京都市長
29㊤	14:00～15:30 10階ホール シリーズ企画「戦後70年 語る・問う」㊤ 早川浩・早川書房社長

会報委員会

- 委員長＝飯塚 浩彦
 委員＝稲沢 裕子 大寺 廣幸 佐塚 正樹
 鈴木 仁 高橋 茂 長崎 和夫
 藤井 良広 藤澤 秀敏 向山 明生
 渡辺 大祐

(事務局：長谷川和子 村田 茜)

☎03-3503-2752 FAX 03-3503-7271

撮影：^{かたぬま} 渦沼 ^{よしき} 義樹 (東京新聞写真部)



解体が進み国立競技場は姿を消した。視界が開けて、代々木や西新宿の高層ビル群が見える
= 6月29日 東京都新宿区

日は沈み続けるのか

『日はまた昇る』という本がある。約十年前、その中で著者の英ジャーナリスト、ビル・エモットは、日本が「失われた十年」を抜け出して復活すると予言した。だが、日はむしろ沈み続けているのではないか。この夏の国立競技場の建設計画見直し騒ぎを見ていると、そんな思いに駆られる。

まず、当初一三〇億円とされた総工費が二五二〇億円に膨れ上がることが、六月にわかった。それだけではない。すでにデザイン料や設計料など約六〇億円相当が大手の設計事務所や企業に支払われ、戻ってきそうもないという。

国民に潤沢に税金が回っているならあきらめもつく。だが、財政難を理由に生活保護基準は下げられ続け、今年度からは介護報酬も引き下げられた。東日本大震災での原発事故被災者支援や賠償に「区切り」をつける動きも加速している。保育園の待機児童もまだ多い。なのに、この放漫ぶりは何？

今度のオリンピックはコンパクトに、という市民運動がある。ここでは、旧国立競技場を手直しし、「簡素で環境にやさしい五輪」という新しいお手本を世界に示そうと呼びかけていた。新競技場計画が手詰まりになった今こそ、その発想を生かそう！

あ、でも、もう旧競技場は取り壊されてしまったんだっけ。

「お金があるんだかないんだか、わからない国だね」。低賃金と子育て支援の不足に悩むシングルマザーの友人がつぶやく。高度経済成長の象徴だった旧競技場の跡地の向こうに、日が沈んでいく。

(竹信 三恵子)